
神様 に入りました。

デルジャイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様 に入りました。

【Nコード】

N3030Z

【作者名】

デルジャイル

【あらすじ】

ある日、願いが叶うと言う神社に行った、一ノ瀬 冬夢。

しかし願いが叶うばかりか、神様と同居する事に…

学園モノのハーレムコメディーにしたいな...と思っています。

処女作の為、誤字脱字や矛盾点など至らない点が沢山あると思います。

もし見つけれたら、ご報告よろしくお願いします。

第1話 巫女さんってマジで「神」ですよ

神様という存在が創り出されたのはいつなのだろう？

聞いておいて何だが、俺も、正確にはわからない。

だが、人類最古の宗教であるとされるユダヤ教。

あれも紀元前には広まっていたと言う。

つまり2000年以上も前に、神様は既に創り出されていたと言う事だ。

そこから、今に至るまで神様の力は衰える事なく人間の側にあり続けている。

日本にも、キリスト教を初めとする信者は大勢いるし「神のみぞ知る」「困った時の神頼み」等、神の使われた言葉もある。

また、クリスマスはイエスの誕生日と言われているし、正月になれば多くの人が初詣に行く。

他にも、お守りなど神様関連の物を挙げていけばきりが無い。

しかし、神様は先程言ったように、人間の創り出したモノに過ぎな

い。

絶対的な存在を創り出す事で、逃げ道を用意して安心感を得ているのだ。

そう、人間はとても弱く…

「おい！もうそろそろ着くぞ」

「…え？ああそうか」

「どうしたんだ？ボーツとして」

「いや…何でもない」

俺…ああ、自己紹介がまだだったな。

俺は一ノ瀬^{いちのせ} 冬夢^{とむむ}。

私立鳳凰学園高校2年（とは言ってもまだなって1カ月も経ってない）だ。

部活は…してる事はしてるのだが、話すとき長くなるのでまたいつか。

で、横にいる空気読めない（俺のイケてる出だしをジャマした）コイツは役所^{やくじょう} 桐生^{きりお}。

俺と同じクラスで親友だ。

部活はサッカー。2年にしてエースで次期部長最有力候補である。

身長は俺と同じ位だから175前後…そして如何にも体育会系と言うような短い髪をワックスで立てている。

悔しいがイケメンである。

悔しいが彼女がいる。

しかも相手は、水泳部に所属し「人魚姫^{はぎはしら}」と呼ばれ人気のある萩原^{はぎはら} 真莉^{まり}である。

桐生と萩原さんが、付き合っていると判明した時の男子達の桐生を見る目は…思い出ただけでゾッとする。

…ん？…俺に彼女がいるのかって？…

自己紹介の時に何も触れなかっただろ？

そう言う事だ…察してくれ。

「ああ…お前みたいに彼女欲しいよ」

「何言ってるんだ？お前なら彼女何ですぐだぜ？」

桐生が驚いたようにこっちを見てくる。

「…桐生…それ何のフォローにも慰めにもなってない…むしろ追撃になってる」

親友と言うデフェンススキルがなければ、俺は完全に撃沈していただろう。

「ホント…鈍いなあ…あいつらが可哀想だ…」

桐生が小さく何か呟く。

「ん？桐生、何か言ったか？」

「いや、何にもねーよ」

ホントは何かあるんだろうが、桐生は言わないと決めた事は絶対言わないので、俺は素直に諦めた。

まあ、そう言う奴だから俺は信頼しているんだけども。

「それに、願いを叶えたいなら俺に言うんじゃないかって…」

言葉を切ってニコツと笑う。

悔しいが、男の俺から見てもカッコいい。

「この薬師丸神社に言うんだな。」

薬師丸神社。

学校の通学路の途中にあるのだが、小さく地味である為に気付かない生徒も多い（少し前までは、俺もその中の1人だった）。

そんな薬師丸神社には、知る人ぞ知る噂がある。

「夜に本殿で願い事をするとう願いが叶う」

所詮は噂なのだが、「もしかしたら……」と淡い期待を抱いてしまうのだ。

何せ、何でも願いが叶うのである。
ただ、お参りするだけで。

しかも、近くにあるのだ。
行って損はないだろう…と言う結論に達し今に至る訳だ。

「よし！到ちや…」

前を行っていた桐生が急に固まった。

「どうした？桐生？急に固ま…」

桐生の視線の先を追い、俺も同じく固まる。

「これアリかよ…」

硬直状態から解放された桐生が呟く。

俺達が見たものは…神社。

まあ、それは当然だ。

しかし…普通の神社ではなかった。

とにかく不気味なのだ。

本殿は、とにかくボロボロで大きな嵐が起きれば簡単に吹き飛びそう
うだ。

それだけでも十分に不気味なのだが、今は夜なので更に不気味さが
増している。

いつアレがでてきても、おかしくない。
アレってのは…アレだ。
口に出すのも躊躇われる。

そこら辺のお化け屋敷よりも、遙かに不気味で怖い。

「なあ…帰らないか？」

桐生が聞いてくる。

「ああ…そうだな」

こうして、俺達は普通に、何事もなく帰りましたとさ。
めでたしめでたし。

このように上手くいかないのが、現実である。

俺達が回れ右して帰ろうとした正にその時…

「ドン！！！！」

物凄い音が本殿から聞こえてきた。

「うわあああああ！」

俺達は、自分でも驚くようなスピードで一目散に逃げ出した。

だったらどれだけ良かったか。

もう一度言うが、現実とは上手くいかない物である。

「うわあああああ!!!!」

「えっ？」

よほど驚いたのだろう。

桐生は俺を突き飛ばして、物凄いスピードで逃げに行った。

おい…待てよ。

いくら何でもそれはないだろ…仮にも親友だぞ？

俺は周りを見渡した。
もちろん誰もいない。

あー…つまりアレですね？
俺…一人取り残された…と。

悲しいかな…

捨て犬や捨て猫の気持ちが少しわかった気がする。

今までは、見て見ぬふりをしてきたが…

これからは餌あげよう。

…そうじゃなくて。

いつの間にか俺は冷静に…いや、正確には醒めてしまった。

親友に見捨てられる程ショックな事は中々ないからな。

見捨てられたショックで頭がおかしくなっていたのかもしれない。

俺は不気味な本殿を見て不意にこう思ってしまった。

「お参りしようかな」

俺はお参りをする為に本殿へと向かった。

本殿に近づいてよく見ると、確かにボロく不気味だったが、賽銭箱もデカい鈴も、鈴を鳴らすロープもちゃんとあった。

「いくらあつたかなあ……」

俺はお賽銭を払うべく、財布の中をチェックする。

500円。

財布の中の小銭入れにはコレだけしか入っていなかった。

「何で500円だけしか入っていないんだよ！」

俺は一人悲しくつつこんだ。

もちろん反応してくれる人はいない……

「シャランシャラン」

風に吹かれて揺れた鈴が反応してくれた。

余計に悲しくなったのは、俺の気のせいではないだろう。

ところで、こういう時お参りを止める、と言う選択肢が普通ならあるのだが……

俺は一度決めた事はやり遂げる主義なのだ。

フッ、俺カッコい…

え？

うるさい？

…さいですか…

「さらば！俺の500円！」

俺は涙を飲みつつ500円を賽銭箱に入れた。

「チャリーン」

ああ…賽銭箱に入っていく音が胸にしみる…

鈴を鳴らして、パン、パンと2回手を打ち俺は祈った。

（彼女ができますよ…）

「ガッシャーン」

俺の祈りを中断する程の、けたたましい音がして俺は慌てて目を開ける。

「な…」

俺は思わず俺の目を疑った。

鈴が落ちていたのだ。

さっきまで普通に付いてたのに…俺のつつこみに反応してくれたのに…

鈴ちゃーん!!!

カムバック!!!

いや…そうじゃなくて。

「ヤバイ…コレ…どーしょ」

鈴を持ってワタワタするものの、良い解決策が思い付く訳がなく…

俺は思い切って…

「よし、取りあえず賽銭箱の上に置いとこう。誰か直してくれるだろう」

諦めて、いつか直してくれるだろう親切さんに託した。

人生、諦めも大切だよね。うん。

「この行為が、一ノ瀬冬夢の平和な日常を、良い意味でも悪い意味でもぶち壊す事となるのだが…
もちろん、この時の彼は知る由もない」

「ん？どこからともなく声が聞こえてきたような…き、気のせいだよな。そうだ、気のせいだ」

俺は賽銭箱の上に鈴をそつと置くと…ダッシュで逃げ出した。

「ハアハア…家に着いたあ」

大した距離ではないはずなのだが…

無我夢中で走ったからか息が切れていた。

ちなみに、俺の家は3階建ての自分で言うのも何だが結構広い家である。

そして俺はそこに一人で住んでいる。

親はどこにいるかと言うと、世界のどこかだ。

俺にもよくわからない。

俺が中学に入学したその日に

「長年の夢だった、世界旅行に行ってくるわ。家は任せた。中学生になったんだ。もう何でも出来るだろ？」

と言い残して行ってしまった。

何とも無責任な親だ。

あの後しばらく、俺がどれだけ苦労したか…

あれから4年以上経つが、一度も家に帰って来ていない。

しかし、週1で手紙と時々お土産が送られてくるので心配はしていない。

更に、月1でどこからこんな金湧いてくるんだ？、と言う位の大金を送ってくる。

親父とお袋の事だから、株が何かで儲けてるのだろうと…信じたい。

もちろん、そんな大金使い切れるはずもなく（使い切る気も無いが）俺の貯金は相当なモノとなっている。

「ただいま」

「おう」

体に染み付いた習慣とは恐ろしいもので、返事がないとわかっていても無意識でただいまと言…

…ん？

イマナニカキコエナカタカ？

いや…あれは俺の幻聴だ。

そう信じたい。

それはそれで問題だが、最悪のパターンよりは遥かにマシだ。

俺は恐る恐るもう一度言った。

「た、ただい、ま」

「おう」

オンナダ…

オ…オンナガイル

叫びたい気持ちをグッと堪えて、俺は声のしたリビングへ向かった。

「う…うわああああ！！！！」

そこにいたのは、巫女だった。

長い黒髪が印象的な、キレイな巫女だった。

しかも、人の家のテレビ勝手に見てやがる。

何て失礼な奴だ。

けしからん。

いや…落ち着け俺。

着目するポイントがずれてるぞ。

問題は巫女がここにいる事だ。

まさか…鈴を落としたからここにやってきたんじゃない…

俺はとっさに行動に移した。

「すみませんでした！」

全力で土下座した。
全力で謝った。

「な…何で謝るのだ？」

巫女の驚いた声がした。
俺は恐る恐る顔を上げる。

巫女はこっちを見て、目を丸くしていた。

「え…いや…」

俺は神社での事を説明した。
もちろん、土下座のままで、だ。

俺が説明すると、巫女は豪快に笑い始めた。

「ハハハハ。別にあんな些細な事で怒る程、私は器の狭い神ではないぞ。それに、もともとボロかったからな。仕方のない事だ」

「そうですか。それを聞いて安し…ん？」

俺の耳が正常であれば、この巫女、恐ろしい事をサラッと言ったぞ。

「あの…巫女さん？」

俺は土下座を止めて、立ち上がる。

「巫女さんとは何だ。私にも音尾おとあ 和なごみと言つ名前があるぞ。」

「じゃ…音尾さん？」

「何だ？」

「さっき自分が神って言いましたか？」

俺は、音尾さんが否定する事を祈った。

正に、神頼みである。

「ああ、言ったぞ。私は薬師丸神社の神だ。そして今日からここでお前と一緒に暮らす事となった。宜しく頼む」

「ハハ…ハハハハハ」

予想の遙か斜めを歩き過ぎた発言がおまけでくっ付いてきて、俺の頭は遂にオーバーヒートしてしまった。

「おい！冬夢！どうしたんだ！しっかりしろ！冬夢！」

… 何で俺の名前知ってるんだよ。

そう頭の中でツツコミながら、意識は薄れていった。

第1話 巫女さんってマジで「神」ですよね（後書き）

まずは、お読み頂きありがとうございます。

どうも始めてまして。

デルジャイルと申します。

処女作の為、誤字脱字や矛盾点など至らない点が沢山あると思います。

その様な点を見つけれましたら、ご報告をお願いします。

第02話 神様だからって、何でもできると思わないように

「ん…」

あれ…何で俺ソファで寝てるんだ？

起き上がって、必死に記憶を引っ張り出す。

確か…薬師丸神社から帰ってきて…
えっと…それから…

何か肝心な事を忘れている気がするのだが、どうしても思い出せない。

と言うよりも、頭が思い出すのを嫌がっている感じだ。

「のわーっ！」

唐突に、台所から悲鳴が聞こえてきた。

…はいはい、思い出しましたよ。

音尾さんって言う女の子が、自分の事を神だと言い張るわ、更にここで暮らすと言い出すわ、で俺の脳の処理能力が限界を超えちまったんだな。

「け、煙が！黒い煙が！どうすればいいのだ！！」

どうしてだろう、嫌な予感しかない。

聞こえてないふりして、また寝ようかとも思う。

（しかし、ここで放置するのは男としてどうだ？）

と、急にもう一人の俺が聞いてくる。

…そうだよな、行くしかないよな。

（そうだ。それでこそ男、一ノ瀬冬夢だ）

いや、勘違いするな。もう一人の俺。

俺が台所に行くのは…

「だ、誰か！！助けてくれ！！」

これ以上放置すると、家を破壊されかねないからだ。

（…確かにな）

だろ？もう一人の俺。

ダッシュで走って台所の入口で大声で叫ぶ。

「おい、音尾！お前何やってんだ！大丈夫か？」

丁寧語？

んなもん、大気圏外に打ち上げてきたさ。

「と…冬夢！」

音尾が、抱きついてきた。

目がウルウルで半泣き状態である。

いつもなら、喜べるシチュエーションだろうが今はそんな場合ではない。

家が下手すりやなくなるかもしれないのだ。

強く抱きついてくる音尾をどうにかどけて、キッチンの中に入る。

何があったのかは、すぐにわかった。

土鍋で何か調理していて、焦がしたようだ。

黒い煙がもつもつと上がっている。

俺は急いで火を切って、土鍋を掴む。

「熱いつ！」

思わず手を離しそうになったが、グツと堪えて流し台に入れ、水をぶっかける。

ジュツと言う音と共に水蒸気が土鍋からあがる。

「ま、間に合った」

俺はその場にペタリと座り込んだ。

緊張の糸が切れ、ドツと疲れが押し寄せてきたのだ。
良くやったぞ、俺。

家を危機を良く守った！

神様もきつと見て下さって、御褒美を…

あ、神様ここにいた。

しかも、この危機の元凶だし。

「だ、大丈夫か？」

音尾もとい元凶が走ってこっちにやって来る。

「ああ、何とか…痛っ！」

興奮が収まったからか、熱々の土鍋を掴んで負った火傷が痛み始めた。

「おい冬夢！お前怪我してるだろ！見せてみる！」

音尾が俺の手を取る。

「こんなの怪我の内に入ら…痛っ」

そう言っつて、俺は音尾の手を振り解こうとしたが激痛で動かせなかった。

「馬鹿者が、火傷しているではないか。」

そう言っつて、音尾は目を瞑り何か一言二言呟いた。

すると、俺の手は淡い光に包まれた。

何だか温かい。

「何だよコレは？」

「治癒の呪文だ」

「治癒？」

「そうだ。ほら、見て見ろ、治ってるだろ」

「本当だ……」

光が消え、再び現れた俺の手に火傷はなかった。

そして、いつの間にか痛みも消えていた。

「……お前……神様みたいなヤツだな」

「みたい……ではなく私は神だ！」

あ、そうだった。神様らしくないからすっかり忘れてた。

「……すまん！」

急に何の前触れもなく、音尾が土下座してきた。

「な、何だ？」

俺は驚いて呆気にとられた。

さっきの音尾の気持ちがよくわかる。

土下座はそう簡単にするもんじゃないな。

いや…そうじゃなくて。

「わかったから、いや本当はわからないけど、取り合えず立ってくれ。話はその後だ」

「お…おっ…」

「急に土下座なんかして、どうしたんだ？」

「勝手に押し掛けて、役に立つ所か迷惑かけて、冬夢に怪我までさせて。本当にすまない。こんな奴と一緒に住みたくはないよな？
…いや、言わないでもわかる。嫌だよな」

いやいや…ちょっと待とうよ。

お姉さんや。

いつ住むって事が決まったよ？

しかし、そんな事をこの場でうつかり口にするほど俺も馬鹿ではない。

それに俺はそこまで迷惑とは感じてなかった。
別に台所が丸焦げになった訳でなく、土鍋が一つ使えなくなっただけだ。

大した損害ではない。
それに火傷も治してくれた。

お人好しすぎるかもしれないが、俺の本心なのだから仕方ない。

だが、一緒に住むって言うのはなあ。
一応俺だって健全な高2である訳だし。

こんなキレイな女の子と一緒に住むのは、精神的にくるモノがある
と言つか、何と言つか。

「流石に一緒に住むってのはなあ…ってあれ？音尾？」

いつの間にか、音尾はキッチンから姿を消していた。

「おい音尾ー。っておい！何してんだ！」

音尾は玄關のドアを開け、出て行こうとしている所であった。

「これ以上迷惑はかけられない。だから出て行く」

「出て行く？薬師丸神社に帰るのか？」

俺がそう聞くと、音尾は弱々しく首を横に振った。

「色々あつてな。あそこには戻りたくないのだ」

「じゃ、どーするんだよ？何かどこかにあてでもあるのか？」

再び音尾は首を横に振った。

そうやって首を振る音尾の顔は、見ているこっちが辛くなる程悲しそうな顔をしていた。

「本当に短い間だがお世話になった」

そう言つて、音尾は出て行った。

ドアの閉まる音が、頭に強く響く。

（このままで本当にいいのか？）

もう一人の俺が、話しかけてきた。

うるさい。わかんないんだよ。

（そう言ってる間にも、音尾は行ってしまっぞ）

そんなの、わかってる。

だけど…

（なあ、俺。行動しないで後悔する位なら、行動して後悔しろ。それに、もう答えは出ているだろ？）

ああ、あんな悲しそうな顔をした女の子を放ってはおけない。

俺は靴も履かずに家を飛び出した。

「おい！音尾！どこだ！」

思い切り叫び、辺りを見渡す。

そこまで時間は経ってないから、遠くには…

「いた！」

100m位離れた所に音尾の姿を確認する。

俺は、全力で走って音尾の腕を掴んだ。

「と、冬夢！どうしたんだ！」

本気で驚いたらしく、目を大きく見開いている。

「音尾こそどうしたんだよ？お前の家はあそこだろ。」

そう言っただけ俺は自分の家を指差した。

「こんな時間に一人で歩き回るのは感心しないよ。さあ、帰るぞ」

「い、良いのか？あんなに迷惑をかけたのだぞ？」

「あんなの迷惑の内に入らねえよ。ほら、早く帰ろっぜ」

「そうか…冬夢…ありがとう、ありがとう」

そう言っただけ、音尾は俺にギュッと抱きついてきた。

つまり、2つの凶器が押し当てられる訳で。

…うわ…柔らかい…。

しかも…デカイ…。

い、生きてて良かったー！！！！

って、そっちに意識を集中してどうする！

折角の感動シーンが台無しになるだろ！

しっかりしろ！俺！

理性を総動員して何とか意識を凶器ではなく音尾本人に戻す事に成功する。

もう少しで、別次元にトリップする所だった。危ない、危な…ん？

音尾の顔を見て、俺はある事に気付いた。

「お前、泣いてるのか？」

「な…泣い…てなど…い…いない」

「泣くな泣くな。俺、湿っぽいの手なんだよ」

「だから…私は…泣いてい…ない…」

「わかった。わかった。そう言う事にしておいてやるよ。それより、晩ご飯まだだろ？ちょっと遅いけど、今日は盛大に歓迎パーティーしてやるよ！料理には自信あるんだ。音尾の好きな食べ物、材料あったら作ってやるから。だから、こんな所で泣いてないで帰ろう」

「本当か！私は鳥の唐揚げが食べたいぞ！」

そう言って、音尾は笑った。

単純な奴だ。さっきまで泣いていたのに。

でも、女の子に泣き顔なんか似合わない。

やっぱり、女の子には笑顔が1番合う。

第02話 神様だからって、何でもできると思わないように(後書き)

誤字脱字や矛盾点などありましたら、ご報告よろしくお願いします。

また、感想などもお待ちしております。

第03話 好物はね、鳥の唐揚げ。更に言えばおかんの作る以下略。

「えーと、鶏肉、鶏肉：お、あつたあつた」

俺は、冷蔵庫から鶏もも肉を取り出す。

本当は照り焼きにする予定だったのだが、音尾のリクエストで唐揚げに変更となった。

「あ、そうだ。おーい、音尾！」

クイズ番組をジッと見ている、音尾に声をかける。

「なんだー？」

そう言つて、音尾は台所にノコノコとやって来た。

ん、ちゃんとテレビ消してこっちに来てるじゃないか。

成長が見れてお兄さんは嬉しいぞ。

「暇なら、お前の焦がした土鍋捨てといってくれないか？」

「それより…冬夢よ、今何か失礼な事考えてなかったか？」

「い、いやそんな事ないぞ？何言ってるんだ」

おいおい、何でわかったんだ？

まさか、心を読んどるとか…

いやいや、よく考えてみる俺。

もし心を読めるなら、迷惑だと思って出て行こうとしたのが説明で
きないじゃないか。

だから、音尾は人のこのは読めない

…はずだ。

「…まあいい。散らかしたものは、責任持って片付けないといけな

いからな。放っておいてすまん」

「いやいや、別に大丈夫だ。それより、音尾。お前何を作ろうとしてたんだ？」

「！！！！」

土鍋を流し台から引き上げようとしていた手が、ピタリと止まった。そして、なぜか顔も真っ赤だ。

まさか、怒ってらっしゃる？

やっぱり、失敗を掘り返されるのは嫌だったか？
機嫌を直すには……どーすりゃいいんだ？？

頭を撫でるか？

いや、それは火に油を注ぐだけだ。

じゃあ、胸を揉むか？

って、おい！

そんなの、火に油どころか火にニトログリセリンだろ！
俺の命が消えてしまう。

そんな事、すぐわかるだろ！

この変態脳が！

あー…何か良い解決策は…

「…粥…」

「え？」

音尾が何か言ったようだが、音尾の声が小さく俺自身、考え込んでいたので聞き取る事ができなかった。

「粥だ！…！」

「粥？…？」

えーっと、粥って…ご飯に水入れてトロトロになるまで煮込んで塩で味付けする、あの粥だよな？

って言うか、粥ってそれしかねーじゃん。

どーやって、黒い煙があがるまで焦がすんだ？

とても常人の…いや、常神のやる事とは思えない。

「音尾、お前お粥好きなのか？」

「ち、違う。自分の為に作ったのではない。…その…冬夢…の為に…」

「お、俺の為？」

「その…急に倒れただろ？だから心配してな…作ろうと思ったんだ。結局、失敗してしまったがな」

「心配してくれてありがとうな。俺、本当に嬉しいよ」

「あつ…えへへへ」

俺は嬉しさの余り無意識の内に、音尾の頭を撫でていた。

うわっ！髪の毛サラサラ！

いつまでも、撫でていたくなる気持ちよさである。

撫でた後に、怒られるんじゃないかと心配したが、音尾は嬉しそうに笑うだけで、抵抗してこなかった。

なるほど、犬が好きな人の気持ちもわかるな。

「と、冬夢…いつまで撫でている…つもりだ？」

「おお、悪い悪い。もしかして、嫌だったか？それだったら、ごめん」

「べ、別にいい、嫌とは言っていない。ただ、あれ以上やられるとだな…」

「やられると？」

「な、何でもないっ！ほら、早く唐揚げを作るぞ！私も手伝える事は手伝う」

続きが気になったが、音尾は言ってくれそうにもなかったので諦めて、調理に取りかかった。

ちなみに、音尾には皿運びなどの雑務をして貰った。

落ち込んでいたが、仕方ない事だ。

いつヘマして、大惨事になるかわかったものじゃないからな。何事も安全第一である。

「こんなに美味い唐揚げは、初めてだ！」

そう言って、音尾は次々と唐揚げを頬張っていく。

やっぱり、自分の作った料理を誰かが美味しいって言って食べてくれるのは、嬉しいね。

次も美味しいものを作ってやろう、って言う意欲が湧く。

「そーいや、神社ではどういう生活してたんだ？」

神様の日常生活が気になって、音尾に聞く。

「言っておくが、あそこは私の家ではない。職場だ。」

「職場って…お前、働いてるのか？」

「ああ。大体、10歳過ぎれば皆働き始める。私も10歳から働き始めてるから、今年で7年目だな」

10歳から？労働基準法も真っ青だな。

…神様に生まれなくてよかった。一度きりの10代を仕事で潰されてはたまらない。

「お前17歳なのか？神様だから何百歳とかだと思ってた」

実際、俺の知ってる神様（とは言っても、マンガやドラマなど見たものだ）は、みんなとんでもなく年寄りだった。

「冬夢、お前中々失礼だな…。まあいい。そうだ。冬夢と同じ17歳だ。神様にも位があつてな、私のような下級神は人間と同じように年もとる。それに、特殊能力も凄いものは使えない。イエス様やブツダ様のような究極神は、不老不死で心を読むなどの凄い能力も使えるがな」

やはり音尾は、心を読めないんだな。

よかった、よかった。

「神様ってのは、みんながみんな凄い能力を使い、何百歳だの何千

歳だのともない年寄りだと思っていたが、そうでもないんだな」

「それは、人間の勝手な想像だ。神だって人間とほぼ同じだ。階級が高いと話は別だがな」

そう言つて、唐揚げを食べる音尾は、確かにどこからどう見ても普通にカワイイ女の子だ。

「神様の仕事つてなんなんだ？ やっぱり、人の願いを叶えるとかか？」

「それは上級神以上の仕事だ。基本的には、魂の誘導とか罰を与えなければいけない人間がいないか、調べたりとかだな。」

「罰は何となくわかるけど、魂の誘導？」

「天国や地獄は広くてややこしいからな。魂を、ちゃんと目的の場所へ連れて行く事が仕事なんだ」

天国も地獄も本当にあるんだな。是非とも宗教学者に聞かせてやりたいものだ。きっと驚くだろうな。まあ、普通誰でも驚くか。それ以前に、神様が実在する事に驚くだろうけど。

「音尾の仕事は何なんだ？」

「私は、上級神のサポートだ。この前まではな」

「ん？この前まで？じゃ、今は何やってんだ？」

「知らないのか？お前の生活のサポートだ」

え？俺のサポート？

俺はそんな事頼んだ覚えはないぞ？

「どうやら聞かされてないようだな。これは冬夢の御両親からの依頼だぞ？」

ああ、なるほどね。俺の親が。道理で音尾が俺の名前を知ってた訳だ。

それなら納得

…できるかぁー！

「お、俺の親父とお袋が？何で神様と知り合いなんだ？」

俺が聞くと、音尾は呆れたようにこつちを見てきた。

「冬夢、お前本当に何も知らないんだな。お前の御両親は、世界中

を回ってその神のサポートをしてるんだ。人間の助けがないと、出来ない事もあるからな。こっちでは、知らない人はいないぞ」

…そりゃ、世界中飛び回ってても、大金が入る訳だ。
何せ、神様のお手伝いだからな。

しかし、息子にも仕事を教えないってどうよ。

今度帰ってきたら、問いつめてやろう。

…この4年以上の間、一度も帰ってきてないけど。

だんだん顔も思い出せなくなってきている。

いつ帰ってくるのやら…

「お前、俺の親に何て言われたんだ？」

「私は、直接聞いてない。ただ、薬師丸神社から誰か一人冬夢の生活のサポートに行ってくれ、と言う指令が上から出てな。私が立候補して来たんだ。何せ、神社に行かなくていいからな」

「そーいや、神社に戻りたくないとか言っていたな。何かあるのか？」

「えっと…それはだな」

言いくそうに、口ごもる音尾。それでも箸はしつかり唐揚げを掴んでいる。

…唐揚げ食い過ぎだ。他のも食べよ。
俺のがなくなる。

「別に言いたくないんなら、言わなくていいぞ。隠しておきたい事は誰にでもあるよな」

「言っても言わなくても、いずれ知られるだろうから言っておく。聞いて驚くなよ」

「わかった。絶対驚かない」

俺が頷くと、音尾は暫く間を置いて言った。

「実は私は、私は求婚されたのだ！当然、断つたのだがそれでもしつこくてな。それでここに逃げる為に来たわけだ」

なぜか誇らしげに、立派な胸を張る音尾。

俺にしては、目の保養になるから一向に構わないんだけども。

いや、むしろもっとやって頂きたい。

保養をし過ぎて、悪い事はないからな。

もちろん、死んでも口には出さ…何らかの理由で死ぬ間際なら言つかもしれないな。

って、何を言ってた俺。

考えてる事が残念過ぎるぞ。

そんなこんなで、現実世界に戻ってくると、音尾は、俺をジッと見つめてきていた。なぜか、目には期待の色が浮かんでいる。

理由がわからず、俺も見つめ返す。

すると音尾は、なぜか目をそらしてしまった。

顔が少し赤い気がしないでもないが、気のせいだろう。

赤くなる理由が見当たらないからな。

「な、何で驚かないんだ!」

音尾は暫く黙っていたが、何の前触れもなく急に怒鳴ってきた。

「ぬおっ?」

完全に不意をつかれて、俺は変な声を上げてしまう。

「急にどうしたんだ?」

「どうもこうもない!」

「と言つと？」

「何で驚かない？」

音尾は椅子から立ち上がって聞いてきた。

なるほど。さっきの目の理由がわかった。俺が驚く事を期待してたのか。

「だって、今日は色々と驚く事がありすぎからな。もう多少の事は驚かない」

ちなみに、全部この前にいるお方関連である。

「…確かに…そうだな」

「それに、音尾はキレイだからな。あり得ない事ではないだろ。告白じゃなくて、求婚つてのは少し驚いたけど」

「な、な、な、な」

音尾は、顔を真っ赤にして口を金魚みたいにパクパクさせ始めた。

「…とりあえず、落ち着きなよ。ほら、水」

俺はその金魚つぷりを十分に堪能してから、コップに水を入れて渡

す。

音尾はそれを一気に飲み干し、深呼吸を一つ。

「もう大丈夫だ」

流石神様である。立ち直るのが早い。

さっきまでの、金魚つぷりが嘘みたいだ。

「何で、あんなに慌ててたんだ？」

「そ、それはだな……」

「うん」

「それは…好」

「もしかして、面と向かってキレイと言われて、恥ずかしかったのか？」

「……ごちそうさま！」

そう言って、箸をテーブルに叩き付け音尾は席を立った。

なぜか物凄く機嫌が悪そうだった。

…何か悪い事したかなあ。

いつの間にかからっぽになっていた、音尾の皿をボーッと眺めながら自分の言動を思い起こしてみたが、理由は最後までわからなかった。

後、音尾…

食べた皿は、キッチンと自分で下げて欲くれよ。

コレ、お兄さんとの約束な。

第03話 大好物はね、鳥の唐揚げ。更に言えばおかんの作る以下略。

（後書き

誤字脱字や矛盾点などありましたら、ご報告よろしくお願いします。

また、感想などもお待ちしております。

第04話 謝罪のススメ

「本当に悪かった。許してくれ」

「……」

返事はない。

「頼むよ。俺が悪かったから」

「……」

また返事はない。

俺は心の中でため息を付く。

かれこれ、10分以上謝り続けている。
しかし進展は全くない。

音尾は自分の部屋（驚くべき事に、音尾は俺の部屋の、隣の空き部屋を既に、そして勝手に自分の部屋にしていた）に閉じこもって、出てこない。

しかも、「丁寧」にドアに

「入るな!!」

と書き殴った紙が、張り付けてある。

この状況をどうやって乗り切ればいいんだ？

「あ…桐生なら、アドバイスくれるかも」

善は急げ、である。

俺は、携帯を取り出して、アドレス帳から桐生を選び出し電話をかけた。

「あ、桐生？もしも…」

「冬夢、悪い！」

いきなり謝られて、俺は返事に詰まった。

何か、今日は謝って謝られてばかりだな。

「どうした？桐生？」

「いや…お前を置いて帰ってしまったただろ？」

「ああ…」

余りにも色々とありすぎて、すっかり忘れていた。

やられた時は、結構傷ついたけれども。

「別に気にしてないよ」

「本当か？それを聞いて安心したぜ。で、どうした？」

「ちょっと、相談したい事があって。今いいか？」

「ああ、全然大丈夫だ。しかし、冬夢が相談とは珍しいな。好きな子でもできたか？」

「だったらいいんだけどな。実は、女の子を滅茶苦茶怒らせてしまつてさ、メールも電話も無視状態なんだよ。どうすればいいかわからなくて…助けてくれ」

もちろん、相手が神であるとか、一緒に家にいるなどは伏せている。説明が面倒だし、信じてもらえない可能性だってあるからだ。

「なるほどな。つまり冬夢は、その子と仲直りしたいんだな？」

「ああ、そうだ」

仮にも、一緒に暮らすのだ。

こんな空気じゃ、精神が参ってしまうのも時間の問題である。

「なら、取引だな」

「取引？」

「そうだ。一つ何でも言う事を聞いてやれ。その代わり、許して貰うんだ」

「…ベタだな」

「ベタだから、効果があるんだよ」

確かにそうだな。効果があるからこそ、一般に定着する訳だし。

「ありがとうな。早速、やってみる」

「ああ、健闘を祈る」

俺は、携帯をしまい、ドアに向き直る。

「あのー、音尾さん？」

「……」

当然、反応はない。

「一つ何でも音尾の言う事聞くから、許してくれないか？」

桐生の言っていた方法を実行する。

ホントに効果あるのか？

「…それは、本当か？」

なんと音尾が反応してくれた。

ありがとうがつ、桐生。

今度、ジューズでも奢ってやらなければ。

しかしここからだ。

音尾と仲直りしないと意味ない。

「ああ、もちろんだ。何でも聞いてやる」

そう言つと、部屋のドアがバツと開いて音尾が出てきた。

「本当かつ！！！」

さっきまで、うんともすんとも言わなかった音尾をこんなにも簡単に部屋から出すとは。

しかも、笑顔である。

ベタの力は、伊達じゃない！

「ああ、もちろんだ。ただ、さっきの俺の不始末を許してくれるならな」

「おう。あれは、私も怒りすぎた。すまん」

おお、許して貰えるだけでなく、あっちからも謝ってきた。

やはり、ベタの力は、以下略。

しかし、どうしてだろう？

目の前で笑っている音尾を見ると、胸騒ぎがする。

コイツはヤバイ、と直感が知らせてくる。

…あ…ああああああ！！

気付いてしまった。

気付きたくないのに、気付いてしまった。

…何でも言う事を聞いてやる…つまり、どんな事を要求されても俺に拒否権はないのだ。

そう、どんな事を要求されても…

嫌だあああああ！！！！

俺、まだ死にたくない！！！！

まだ青春を十分に謳歌できてないのに！
彼女できてないのに！！

ここで死ぬ訳にはいかないんだあ！

「あの…音尾さん？」

「ん？何だ？」

「さっき、何でも言う事聞いてやるって言いましたけど、流石に何でもは…」

「何だと？」

「だから、流石に何で…」

「何だ？聞こえんなあ？」

…怖い！怖すぎる！

笑顔だけど、目が…目が笑ってない。

それに声にも凄みがある。

これ以上言ったら、俺絶対に殺される。

ん？ちよつと待て。

って事は…八方塞がりじゃないか。

どっちに行っても、待っているのは死。

ああ…神様助け…

って神様ここにいるし。

こんな展開、前にもあったような…デジャヴか？

いや、実際あった…しかもさつき。

音尾、本当は神様なんかじゃなくて、疫病神なんじゃ…

って、疫病神も神様だったな。

「では、頼みを言っぞ」

「あ、ああ」

ええい！

こうなれば、どんなに恐ろしい頼みがきても、乗り越えて見せようじゃないか！

さあ、来い音尾！！

漢、一ノ瀬 冬夢。

全てを受け止める！

「そ、その、私の事を名前で呼べ！！」

「…へ？」

な、名前で呼ぶ？

そ、そんな簡単な事で、いいんですか？

何て優しいお方なんだ！

さっき、疫病神なんて言っでごめんなさい。

あなた様の事、滅茶苦茶疑ってしまっでごめんなさい。

あなた様は女神様です。

優しさで出来てる女神様です。

「え？、とは何だ！な、何でも言う事を聞くと言っただろ！」

「ああ、悪い悪い。その…和」

名前で呼ぶ位、簡単だと思っていたが、いざ呼んでみると意外と気恥ずかしい。

まあ、死ぬよりはマシか。

「もう一度呼んでくれ」

「和」

「えへ…えへへへ」

名前で呼んで貰うのが、そんなに嬉しいのだろうか。

和は、幸せそうに笑っていた。

よくわからないな。女の子って言う生き物は。

まあ、仲直りできたので、別にいいんだけど。

「そーいえば、和」

前々から、気になる事があったのでこの際聞いてみる。

「お前、巫女服以外の服持ってるのか？」

和は食事の時も

「当たり前だ。ただ、着替える暇がなかったただけだ。ちょっと待て。着替えてくる」

そう言つて、和は部屋の中に戻つていった。

和の私服かぁ。俺の予想では、性格から見て、部屋着はジャージだな。

いや、意外に着物とか…。

「どうだ！」

「おお」

和の服装は、ジャージでもなければ、着物でもなく…

英語が書かれている白のＴシャツに、黒いパンツという、平凡な、どこにでもある服装だった。

しかし、それを和は、上手く着こなしていた。

ハデに着飾っているそこら辺の変なモデルより、全然キレイである。

流石神様…いや、神様は関係ないか。

「他には何持ってきたんだ？」

「衣服類以外は…ケータイと財布と通帳位だな」

「ケータイ持ってるのか？」

「当たり前だ。あんな便利なものを使わない訳がないだろう」

神様がケータイを使うとは…俺の頭の中の神様像がどんどん変わっていくなあ。

「まあいいや。とりあえず、必要な物の中で、家で揃えられる物は揃えよう。で、足りない物…例えば家具とかは、土日に買いに行こう。だから、今日明日の2日は悪いけど、我慢してくれないか？」

「もちろんだ。こっちは住まさせて貰う身だしな。それより、冬夢…」

「ん？どした？」

「その…買い物は二人で行くのか？」

「俺はそのつもりだけど、誰か一緒に行きたい人でもいるの？」

「いや、そうじゃない。ただ確認しただけだ。…二人で買い物か…」

えへへへ」

「??？」

買い物するだけなのに、何であんなに嬉しそうなんだ？

デートじゃあるまいし。

…考えれば考える程、謎は深まっていくばかりである。

「まあいいか。和、風呂入ってないだろ？俺はもう遅いし疲れて眠いから、明日の朝入るけど、和は今入るか？」

「ああ、シャワーを使わせてくれ」

「その代わり、俺はもう寝るから、全部の部屋の電気消しといてくれ。ああ後、バスタオルは洗面台の左下の棚に、ドライヤーはバスタオルの棚の一つ上の棚に入ってる。バスタオルは、使ったら洗濯機の中に入れといてくれ。布団は部屋の押し入れに入ってるから、自分で敷いてくれ」

「わかった」

「じゃ、おやすみ」

「おやすみ」

こうして、神様と一緒に暮らすと言う、新たな生活がスタートした。

第04話 謝罪のススメ（後書き）

誤字脱字や矛盾点などありましたら、ご報告よろしくお願いします。

また、感想などもお待ちしております。

第5話 平和なんてモノは、所詮ハリボテ作りでしかない事を忘れるな (前書

ヒロイン2人目登場です。

第5話 平和なんてモノは、所詮ハリボテ作りでしかない事を忘れるな

「ん…ふぁーあ…今何時だ？」

俺は、枕横に置いてある時計を確認する。

5時30分。

普通の学生なら、「まだ寝れるじゃないか」と安堵し、夢の中に再突入するだろうが、俺の場合、残念ながらそうはいかない。

何せ、親がいないのだ。

つまり、朝ご飯を作り、更に学校で食べる昼の弁当も俺が作らなくてはならない。

他にも、朝の内に済ませておきたい家事もある。

高校生兼主夫の生活は忙しいのだ。

だから、この時間に起きないと、間に合わない。

最初の方（つまり、中学1年の時）は、起きるのが辛くて仕方がな

かったが、今では目覚まし無しで5時半に起きれる。

俺の数少ない、自慢できるモノの一つだ。

ん？

…地味過ぎる？

…ほっとけ…

「今日から、ご飯2人前作らないといけないんだな。そーいや、あいつ…洋食食べれるのか？聞いたけばよかったな」

それなら今日の朝食は、塩鮭と漬け物と味噌汁と納豆にご飯でいいかなあ、などと献立を考えつつ台所に向かった。

「おはよう」

「ん、おはよう。何だ、もう起きたのか？もっとゆっくり寝てると思ってた」

6時半過ぎになって、和が起きてきた。

神様だから知らないが、眠気と言うモノを微塵も感じさせずシャキツとしている。

「実は、朝早くから行かなければならない場所があつてな。」

「へえー。どこに行くんだ？」

俺は、席に着いた和の前に、朝ご飯（最初予定していた献立に出汁巻き卵を追加）を出しながら聞く。

「まあ、色々あるのだ。何、冬夢には後々わかる事だ。そんな事より冬夢、もう食べていいか？こんなご馳走を目の前にして、お預け

は拷問に等しい」

「あ、ああ。悪い、食べてくれ」

何か、物凄く意味深な発言をしたような気がするが…。

目をキラキラと輝かせ、俺の作った朝ご飯を凝視している和にこれ以上聞くのは無理だと判断した俺は、和に食べるよう促す。

しかし、ここまで俺の作ったご飯を褒めてくれるとは…。

嬉しいを通り越して、もはや恥ずかしい。

「いただきます！」

和は、そう言っや否や勢いよくご飯を食べ始めた。

いやー、勢いよくご飯を食べる女の子ってイイよね。

見ているコツチまで食欲が湧いてくる。

食べているのが女の子じゃなくて、デブな男だったら…

あら不思議。一瞬で食欲がなくなるのだから、世の中は、意外と残酷だ。

「そーいや、和」

食事が終わり、食器を台所に運んでいる和に声をかける。

「ん？どうした？」

「食洗機の横に弁当あるだろ？」

「ああ。青いのと黄色いのと2つある。それがどうしたのだ？」

「いや、昨日和が昼ご飯どうするか聞くの忘れてたから和の分の弁当もとりあえず作つといたんだ。よかったら、持って行ってくれ。和のは黄色い弁当の方だから」

「ほ、本当に持って行っていいのか？」

「ああ。もちろん。逆に持って行ってくれた方が嬉しい。残すのは持っていないからな」

「そうか。…えへへへ…冬夢の手作り弁当かあ…えへへへへ」

台所にいるので、顔はわからないが声からして、どうやら喜んで貰えたようだ。

朝早くから作った甲斐があったってもんだ。

「ありがとな。冬夢。大変だっただろ？弁当作るのは」

「いや、全然大丈夫」

「そうか。本当にありがとな」

そう言って和は、そのまま二階に上がって行った。

「さて、俺もそろそろ学校に行くかな」

ぼーっと見ていたテレビを消して立ち上がる。

ちなみに、和はあの後すぐに出かけて行った。

はたして、何しに行ったんだろうな

1番可能性として高いのは、神社だろうが神社には戻りたくないと言っていたしな。

まあいいや。

夜にでも聞いてみるか。

「この時の一ノ瀬冬夢はまだ知らない。日常の崩壊が既にスタートしている事に…」

「…何か声が聞こえた様な気がしなくてもないが…まあいいや。学校行こう」

「おーっす。桐生」

教室に入った（ちなみにB組である）俺は、まず桐生に声をかける。

昨日のお礼をする為だ。

もし桐生のアドバイスがなかったら…今頃俺はあの気まずい空気に耐えきれなくなって精神を病んでたに違いない。

それだけ、あの時の空気は重かったのだ。

神様恐るべし？

…いや…神様関係ないか。

「よう、冬夢。悪かったな。昨日は」

「いや、大丈夫。もう気にしてない。それよりありがとうな。お前のアドバイス通りにやったら仲直りできた」

「それは良かった。で、相手は何を要求してきたんだ？」

「それが、意外も意外だな。名前で呼んでくれ、って要求されたん

だ。あまりに簡単な要求で思わず驚いてしまったよ」

俺がそう言つと、桐生は大きく溜息をついた。

え？なんで？

溜息をつくような内容か？

「…冬夢、もはやそこまでくるとわざととしか思えないぞ」

「え？なにが？なにが？」

慌ててそう聞くと、桐生は苦笑いするだけで何も答えてくれなかった。

「やっぱりか…」

俺は諦めて自分の席に向かう。

前にも言ったと思うが、あいつの口の硬さは尋常ではないのだ。

昔、中学生の時に桐生の好きな人を知ろうとして、くすぐった事があるのだが口を割ろうとせず、俺がくすぐり疲れて負けたと言つ事があった。

まったく…スークかよ…

「おはよー冬夢！」

「ああ。おはよ、美都」

自分の席に座ると、横の席の榎本^{えのもと} 美都^{みと}があいさつをしてくる。

榎本 美都。こいつは幼稚園からの幼馴染（ちなみに家は近所である）で、バスケ部に所属し、エースとして活躍している。

また、頭も良く見た目も物凄くイイ為、男子から物凄く人気がある。

告白する人も後は絶たないらしいが、俺の知る限りでは未だ成功率0%。

性格はややキツめだが、男子いわくそれがツインテールとマッチして最高なんだとか。

「ねえねえ、冬夢。今日ウチのクラスに転入生がくるんだってー。知ってた？」

「いや、知らなかった。にしても、こんな時期に転入とは中途半端だな」

「そうね。急な転勤とかかなあ？どんな子が来るか楽しみよね」

「俺的には、女の子がいいな」。それもカワイイ子やキレイな子。って、美都？どうした？急に席立って」

「用事を思い出したのよ！フンッ」

そう言っつて美都は教室の外に行ってしまった。

何か不機嫌そうだったけど…俺、何かマズイ事言ったかな？

…昨日の和にしても美都にしても、急に怒ったり不機嫌になったりと女の子の感情の起伏ってわからないな。

「じゃあ、朝礼始めるぞ。委員長号令ー」

「起立、礼」

『お願いしまーす』

「着席」

そして、今は朝礼の時間。

どうやら転入生がこのクラスにくる事は、既にクラス全員が知っているらしく、全体的に空気が浮ついている。

…ただ一部を除いて。

「ホントにごめんって」

「……」

「反省してるから。許してくれ」

「……」

俺の横に、不機嫌オーラ全開の美都様がおられます。

いくら謝っても完全無視。

あれ？

このパターンどっかで…

あ…昨日の夜の和とのやり取りもこんな感じだったような。

って事は、昨日桐生から教わったアレが使えるんじゃない…

よし、早速実行だ。

「あのー美都さん？」

「……」

「何でも言う事聞きますんで、機嫌を直して下さいませんか？」

「…それホント？」

うわ、スゲー。

あんなに不機嫌だった美都が返事を返してきてくれた。

「ああ。ただし、無茶苦茶なのは無しな。できる事なら聞いてやるよ」

昨日の様な恐怖との闘いを防ぐ為に、あらかじめ予防線を張っておく。

同じ失敗は二度と繰り返さない。

どーだ凄いだろ！

…え？

女の子を不機嫌にさせたり怒らせてる時点で、偉くなんかない？

…ですよー…

「んーそうね。…今すぐにパツと浮かんだモノじゃ何か勿体無い気がするから、しっかり考えてくるわ」

「OK。わかった。でもなるべく早めにしてくれよ？」

「わかってるわよ。それより冬夢、先生が転入生について話してる」

そう言われて俺は、意識を前にいる先生の方に向ける。

「えー、みんな知っているだろうが、このクラスに転入生が来る」

「先生？転入生は女の子ですか？」

男子の中の誰かが、クラスの男子を代表して聞く。

「ああ、女子だ。しかもだな…喜べお前ら。物凄くキレイだ」

先生のその一言で、男子達が一気に殺気立つ。

もちろん俺もその内の一人だ。

「よし、じゃ入って来い」

そして、入って来た転入生を見て俺のテンションは一気にクライマックスに…

クライマックスに…

なれなかった。

周りが興奮して盛り上がっている中、俺はただただ自分の目を疑った。

だって入ってきたキレイな転入生は…

「音尾 和だ。よろしく頼む」

そう、和だったのだ。

第5話 平和なんてモノは、所詮ハリボテ作りでしかない事を忘れるな

(後書

誤字脱字や矛盾点などありましたら、ご報告よろしくお願いします。

また、感想などもお待ちしております。

第6話 人間の嫉妬から起きる行動程、怖いモノはない

「音尾 和だ。よろしく頼む」

男子の皆様が大はしゃぎしてる中、俺は呆然としていた。

知り合った女の子が自分の学校に転入してくる、なんてシチュエーションはマンガなどの世界だけだと思っていたが…

まさかリアルに体験する事になるとは…

世の中、何が起こるかわからないな。

「音尾さん？どこからきたんですか？」

「好きな食べ物は何ですか？」

「彼氏いるんですか？」

男子は皆、鬼の形相で和に次々と質問をぶつけている。

和は確かに物凄くキレイだからな…

少しでも接点を探し出して、関わりを持ちたいのだろう。

「3サイズ教えて下さい？」

「もし彼氏いないなら、俺と付き合ってください？」

「とにかく俺を罵ってください？」

…あれ…

何か、変態発言が飛び出してる気がするの
は俺だけか？

「わかった。質問に答えていこう。前に住んでた所は、みんな知らないような田舎だ」

おお、さすが和。ちゃんと神様である事を隠してる。

神様である事がばれたら大変な騒ぎになる事は火を見るより明らかだ。

和がドジッ娘属性じゃなくてよかった。

ドジッ娘は画面の中だけで十分だ。

…発言がキモい？？

…すみません…

「好きな食べ物は鶏のから揚げだ。あれを超える食べ物を、今まで私は食べたことがない。あのパリッとした衣に肉汁を含んだ柔らかい鶏肉。その2つが合わさることによって」

おい、和。自己紹介じゃなくてから揚げの紹介になってるぞー。

そう言ってやりたいが、もちろん口には出さない。

口に出してしまうと俺と和が知り合いである事がばれてしまう。

そこから芋づる式にずるずると、色々な事（和が神様である事や俺と同居してる事だ）がばれてしまうだろう。

それだけは避けたい。どうしても。

特に同居なんかがばれた日には……。

俺を待ち受けているのは尋問 いや拷問か？

ああ…考えただけでも恐ろしすぎる。

「…冬夢。顔が真っ青よ。どうかしたの？」

「いや、だ…大丈夫だ」

俺が元の世界に帰ってくると、いつの間にか和の自己紹介は終わっていた。

「ちくしょう…ちくしょう…ちくしょう…」

「ああ…スゴイ！なごみんの鋭い視線が気持ちいい！！」

この世が終わったような顔で何か呟いているヤツと、自分の体を自分の腕で抱いて身悶えてるヤツがいるが…

…一体、和のヤツ何て言っただんだ？

まあ想像はつくけどさ。

とりあえず、あの哀れ(?)な二人に祈っておくか。

なんか目の前に神様がいる中で祈るって変な気もするが…。

アーメン。

「それじゃあ、和は…」

どうやら先生は、和の座る席を探しているようだ。

男子が自分の横に座って貰おうと必死にアピールしている。

「先生。俺の横が空いてます！」

「ちょっと待て！ここは俺の席だ。何勝手に俺をいらないものとして扱ってんだよ！」

「うつせーな。お前みたいなブサイクに席は必要ない。お前は一番後ろで正座してろ」

「なんだとコラー!!」

うわー。ケンカまで起こってるよ。

美少女の力って恐ろしいな…。

誰の横に座るかだけでこのザマだ。

もし、同居してる事がばれたら…

…拷問どころじゃ済まない。

親父、お袋…あんた達のせいで俺はこれから死と隣り合わせで生きていかなくちやなりそうだ。

「んーじゃあ、音尾。お前、一ノ瀬の横に座れ。一ノ瀬は一番後ろの窓側から二番目だ。机は掃除箱の横にあるからそれを運べ」

「わかりました。先生」

おお、和が丁寧語を使ってる。いつも男勝りな口調だから、なんか斬新…。

って、ちょっと待て！

和が俺の横に座る？

確かに、和と一緒に授業を受けれるのは嬉しい。だが、男子全員を敵に回してまで受けたいか？、と聞かれると当然答えはノーだ。

俺は勢いよく立ち上がり、先生に抗議する。

「先生！勝手に決めないで下さい！」

「うるさい。お前に拒否権はない」

一瞬で切り捨てられましたよ。はい。

もう少し考えるとかがあってもいいだろ、先生。

「何だ？あいつ？」

「音尾さんが隣に座るのを拒むとか調子に乗ってるのか？」

「殺す。あいつ絶対殺す」

あれー…おかしいな。

男子を敵に回さない為に抗議したのに、殺気を向けられているぞ。

って事は、逆の事をすればいいんだな。

「わかりました、先生。音尾さん、こっちですよ」

ちなみに丁寧語で話したのも名前を苗字＋さん付けで呼んだのも俺と和が既に知り合いである事を悟られないためである。

「…音尾さんと隣に座るとか…死ね」

「ちょっと顔がいいからって調子に乗りやがって…死ね」

「一ノ瀬を後で、屋上に連れ出して…殺す」

よしよし、これで殺意を向けてた男子も…って…

…あれ？

何で？変わってない…

いや、むしろ殺意増してるような…

「俺を産んでくれた、お父さんお母さん。ごめんなさい。俺は今犯罪に手を染めようとしています。悪いのはわかってます。でも、目の前のあれを始末しなければならぬのです」

そう言つて1人の男子が突然、席から立ち上がる。

「そうだ。一ノ瀬を殺らない限り世界に平和は訪れない」

「音尾さんを守るんだ！みんな立ち上がれ！」

「……オーツ……！！」「……」

何に感化されたかわからないが、男子が一丸となって俺の席にギリギリと近づいて来る。

ちなみに、桐生は席に座って楽しそうにコッチを見ていた。

口パクで「頑張れよ」と言っているのがわかる。

…桐生…裏切ったな？

まあ、俺が桐生と同じ立場だったら同じ事してただろうけど。

って、そんな事をのんきに考えてる場合じゃない？

これは怖い…ガチで不気味だ。

だって、みんな目が虚ろだし…さらにつわ言のように何かブツブツ
呟いている。

…このままじゃ殺される！

生命の危機を悟った俺は、席を立ちダッシュで教室のドアに…

…行けなかった…

もう既に、男子がドアを封鎖していたのだ。

クソッ。何でこんな時にだけこいつら団結力いいんだよ。

「みんな！かかれーっ！」

男子が俺に飛びかろうとした正にその時！

「やめろー！！」

和の声が教室に響き渡った。

「貴様ら！集団で冬夢を襲おうとする事がどれだけ恥ずかしい事かわかってるのか！」

いきなり始まった和の説教に俺を含めた男子全員がポカーンとする。

「それでも貴様ら男か？本当の男なら1人で堂々とやれ！わかったな？」

「……」

「わかったな？」

「……はい」

男子はみんなすごすごと、自分の席に戻って行った。

「……ふうー、助かった和。ありがとうな」

机を運び、椅子に座った和に俺は言った。

「いや。当然の事だ。い、一緒に住む仲なのだからな」

「そうかもしれないが、それでも…っておい！何言ってるんだ！」

「？」

和は何がなんだかわからない、といった風に首を傾げる。

その姿はとてもカワイくて…

ってそうじゃない。

俺は恐る恐る周りを見渡す。

男子全員がコツチを睨んでいた。

目が怪しく光っているのは、俺の気のせいだと思いたい。

コレハヤバイ

俺はドアの所にまだ誰もいない事を確認すると全力ダッシュして…

しかし、その願いが叶う事はなかった。

なぜなら…

「どう言う事がシツカリ説明して貰おうかしら？」

俺の腕をガツシリと美都が掴んでいたからだ。

「何で美都が…何で美都が邪魔すーうわあああああ!!」

俺はこの後、地獄の方がマシではないか?、と想ってしまっ程恐ろしい尋問を男子全員+美都から受けるハメとなった。

ところで、何で美都のヤツ…俺の邪魔したんだ？

第6話 人間の嫉妬から起きる行動程、怖いモノはない（後書き）

誤字脱字や矛盾点などありましたら、ご報告よろしくお願いします。

また、感想などもお待ちしております。

第7話 人の機嫌と言つものは些細な行動一つで大きく変化するから気を付けろ

ヒロイン3人目登場です。

第7話 人の機嫌と言うものは些細な行動一つで大きく変化するから気を付けろ

「ああ…ようやく昼休みだ…」

俺は、大きくそして深く溜め息をつく。

結局、男子全員＋美都に捕まり、「和とどう言う関係なのか？」と毎休み時間に散々問い詰められたのだ。

ウソをついても、そのうちばれてしまうと思い俺は和と同居している事を認めた。

流石に、神様である事は言えないので遠い親戚、と言う事にしておいたが。

真実を話している時、男子達は殺意以上の何かがかもった視線を俺に浴びせかけてきたが、和の説教のおかげか実力行使にでるヤツはいなかった。

ありがとう、和。君のおかげで尊い命が救われた。

いや待て…

和がいらない事を言わなければ…

こんな事は避けられたんだよな？

後でいらない事は喋らない様に、キツく言うておかなければ。

ないとは思いたいが、すっかり自分が神様だとばれてしまったら…
それこそ収集がつかなくなる。

気を付けよう。

そんな事を思いながら俺は、弁当を鞆から取り出す。

ちなみに俺の通っている高校では食堂もあるのだが、毎日食堂とお金がかかるので弁当を作っている。

料理はどっちかと言うと好きな方だし。

「おお！鳥の唐揚げが入っているではないか！ありがとう、冬夢」

弁当のフタを開けた和が、目を輝かせる。

ホント、和のリアクション見てると次も美味しいの作ってやるって思えるな。

「…」

そんな和を美都は不機嫌そうにじーっと見ている。

「どうしたんだ？美都？」

「…フンッ…何でもないわ」

せつかく機嫌を直す事に成功したのに、直した後すぐに本日2回目となる不機嫌モード突入してしまったのである。

何にも悪い事したつもりないんだけどな…

かと言って、もう流石にあの方法は使えない。

さて、どうしたものか…

「一ノ瀬先輩！一緒に弁当食べましょー！」

そう言っただ教室に入ってくる女の子が目に入り、俺は美都の機嫌を直す方法を考えるのをやめる。

正直、俺1人では無理だ。

後で桐生に相談するでしょう。

…ヘタレすぎる？

ほっとけ！

とりあえず今は…

「いいぞー中溝。今日も食べよう」

教室に入って来た女の子は高１のなかみぞ中溝 かずさ和紗。

ソフトボール部のピッチャーをしている。

小学校の時からやっていたらしく、すでに試合に出させて貰っているんだとか。

「えへへー。ありがとうございます、先輩。」

そう言っただ溝は、俺の前の席に後ろ向きに座り俺の机に弁当を置く。

「あ！今日は唐揚げですか？ボクのトンカツと交換して下さい」

ちなみに、ボクっ娘である。

髪の毛がショートヘアで口調も男っぽく、また胸もぺった……スレNDERな為に、私服姿だと男に間違われる事もあるらしい。

また、告白してくる人（女子も含む）が最近増えてきているらしく、困っているそう。

中溝においても、俺の知ってる限り告白成功率は美都と同じく0%。

告白してくる人の中には、1人くらいタイプがいてもおかしくないと思うが…

いやはや、モテる人の考えはわからないな。

ところで、何でこんなモテる女の子と一緒に弁当食べてるんだ？、と思う人がいるかもしれないが、こうなったのには色々あったのだ。

話したい気持ちは山々だが、長くなるのでまた今度。

「おう、イイぞ。ほら」

俺は唐揚げを中溝の弁当のフタの上にのせる。

「ありがとうございます！先輩の唐揚げ…えへへ…嬉しいです」

「そうか？まあ、喜んで貰えてよかった」

先輩の部分を、強調したような気がするが…気のせいかな。

「ところで先輩」

「ん？何だ？」

「先輩の隣にいる方は先輩の知り合いですか？見かけない顔ですね」

「ああ、和の事か？こいつは今日から転入してきたんだ。ほら和、自己紹介」

「音尾 和だ。今日からこの学校に転入してきた。よろしく頼む」

「ボクは中溝 和紗です。こちらこそよろしくお願いします。…それより先輩、どうして今日転入してきたばかりの音尾先輩を名前で呼んでるんですか？」

そう言ってニコツと笑いかけてくる中溝。

カワイイ後輩の笑顔を見れるのは嬉しい。
目も笑ってくれるのもっと嬉しいのだが…

仕方なく、俺は和と同居している事を話した。

ウソをついたところで、どうせみんな言いふらすので、ばれるのは目に見えているからだ。

「そうなんですか。音尾先輩と同居ですか。…これは対策を練らないとダメだね…」

中溝は、ブツブツ言いながら食べてる途中の弁当を片付け始めた。

「どうしたんだ？中溝」

「用事を思い出しまして…先輩方失礼します。後、榎本先輩に音尾先輩、ボクは絶対に負けませんからね」

最後に意味不明な言葉を残し、中溝は教室から出て行った。

3人で、何か勝負でもしてるのだろうか？

でも和と中溝はついさっき知り合った訳だし。

んー、わからん。

しかし、和と美都には通じたらしく2人とも険しい顔をしている。

「なあ2人とも、あれどういう意味なんだ？何か勝負でもしてるのか？」

「…冬夢、アンタ鈍すぎ」

「同感だ。冬夢は女心を理解してなさすぎる。少しは学ぶべきだ」

「お、おう」

質問に答えてくれるどころか、なぜか怒られてしまった。

なんで？

「ねえ、冬夢。何でも言う事聞くなって朝に言っただわよね？」

「え？…ああ、確かに言っただな」

急に話が変わった為に、少し反応がおくれてしまう。

「じゃあ…今日の夜ご飯と、冬夢の家で食べさせて…」

そう言う美都の顔はどうしてか、リンゴのように真っ赤だった。

「ああ。別に構わないぞ」

たいして断る理由もない（断れない立場にあるのだが）ので、俺はOKする。

「ホント？ホントに？」

「ああ、もちろんだ。言っただろ？何でも言う事聞くって。別に構わないだろ？和？」

「……ああ…冬夢が約束した事だからな…仕方ない…」

「和？」

「冬夢のご飯を…出来たてで食べれる…フッフ」

美都の機嫌が直ったっぽいのは嬉しいが、次は和が落ち込んでいる。

「…一体どうすればいいんだよ…」

思わず頭を抱えてしまう俺であった。

第7話 人の機嫌と言うものは些細な行動一つで大きく変化するから気を付けろ

誤字脱字や矛盾点などありましたら、ご報告よろしくお願いします。

また、感想などもお待ちしております。

第8話 ラノベやマンガのように思い立ったらすぐに部活を作る程、学校の規

ヒロイン4人目登場です。

第8話 ラノベやマンガのように思い立ったらすぐに部活を作れる程、学校の規

「起立、礼」

「「「ありがとうございますー」「」「」

先生のムダに長く意味のない終礼が終わり放課後。

俺の体力は色々ありすぎてに0に近かった。

回復薬？ポーション？

んなモノとづくに使い果たしたよ。

ホントならこのまま真っ直ぐ帰って、ベッドへ倒れ込みたい気分なのだが残念ながらそれはできない。

したくてもできないのだ。

それはなぜか。

…そう部活だ。

休めばいいじゃないかと思うかもしれないが、俺が行かないと迷惑がかかるのだ。

頼りにされるって大変だね。

「じゃ美都、また後でメールする」

「え、ああ…わかったわ。また後でね」

俺は美都にそう言って教室を出た。

「クソ…桐生のヤツ…逃やがった」

廊下を歩きながら俺は呟く。

放課後に桐生と朝見捨てた件について、じっくりと「お話」しようと考えていたのだが、どうやら俺の考えはお見通しだったらしく、さっさと部活に行ってしまった。

変に勘がイイからな、桐生は。

ところで和はどこに行ったかと言うと…

「女子剣道部を見学してくる！」

とやけに興奮した感じで女子剣道部員と一緒に剣道場に行ってしまった。

しかし、長い黒髪＋美少女＋巫女服が似合う＋剣道って…

ホント、マンガのヒロインみたいなヤツだ。

普通、こんな特徴持ったヤツ現実にはいないぞ。

まあ、神様に人間の常識は通用しないか。

そんな事を考えているうちに部室前にたどり着く。

正確には部室ではなく、家庭科調理室なのだが。

これで俺の所属しているクラブ名がわかっただろ？

そう…

「料理部」だ。

なぜ男である俺が、料理部に入ったか？

これにはちゃんとした理由があるのだ。

前にも言ったように俺は1人暮らしである。

つまり、食事は全て自分で作らなければならない。

当然、献立も自分で考えなきゃならない。

そこで料理のレパートリーが増やせればいいなと思い、料理部に入部したのだ。

抵抗はあったが腹に背は変えられないし、1年も経つとなれてしまった。

しかし、大きな問題点が1つ。

それは…

「…ちよつと遅れたかな？」

「大丈夫ですよ、先生。私以外まだ来ていませんから」

そう、料理を教えてもらう為に料理部に入ったのに、いつのまにか先生と呼ばれ教える立場になってしまったのだ。

最初の方は顧問の先生（家庭科を教えている若い女の先生）が教えていたのだが、俺が先生よりウマく作れてしまった為、俺が教える

ハメになってしまった。

まあ、教えるのは楽しいし別に構わないんだけども。

「部長、まだみんな来てないのか？」

「ええ。今のところは一ノ瀬君と、私だけです」

料理部部长、水沢^{みずさわ}麗奈^{れいな}は微笑を浮かべながら言う。

部長は、大人しい人で誰に対しても敬語を使う。

本人いわく、日頃敬語で話す機会が多い為クセがついてしまったとの事。

この変なクセからもわかるように、部長はお嬢様である。

部費が全く足りないのも部長が全て負担してくれているから。

いやーありがたやありがたや。

部長もモテるのだが、「好きな人が既にいますので」と言って全て断っているらしい。

と言っても、部長が告白したなどという話は聞いた事がないので多分相手をなるべく傷つけないように配慮して言っている嘘なのだろう。

後、部長は俺と同じ高2である。

「それよりも、一ノ瀬君。私の事は部長ではなく、名前で呼んで下さいと何回も言っていますよね？私にも水沢 麗奈という名前がちゃんとあるんですよ」

「ああ、そうだった。何だか慣れなくてな…悪い水沢」

「……」

「水沢？」

水沢は顔を赤く染めボーツとしていた。どうやら俺の声も届いていない。

何でこうなった？

「おーい水沢ー」

「……」

「水沢ー聞こえてるか？」

そう言っただけは軽く水沢の肩を揺らした。

「ひゃう！い、一ノ瀬君？」

「おかえり、水沢。ようやくコッチの世界に帰ってきてくれたか」

「…一ノ瀬君がキチンと名前と呼んでくれるなんて幸せです…」

「水沢、何か言ったか？声が小さくて聞こえなかったんだが」

俺がそう聞くと水沢は顔を柿のように赤くし、大きく両手を振りつつ

「な、何でも、何でもありませんよ。それより準備しましょう。い、一ノ瀬君も手伝って下さいね」

と言ひ家庭科準備室に早足で行ってしまった。

「あ、ああ」

取り残された俺はただ水沢の後を着いて行くしかなかった。

「じゃあ、今日はチョコチップクッキー作ってみようか」

「はい、先生」

「その先生つてのやめてくれ。何かムズムズするから」

「はい、先生」

「帰っていいか？」

「はい、いいえ、一ノ瀬君」

「それでいいんだよ。じゃ早速作って行くぞ」

「はい」

ちなみに部員は幽霊部員状態の先輩達を除くと12人。

その中で11人は女子である。

つまり、男子は俺1人なのだ。

最初は、女子独特の雰囲気にも多少辟易したが
今ではもう慣れてしまった。

水沢目当てに入部しようとする男子がたまにいるそうだが、そうい
うのは全部水沢本人が直接断っている。

また、女子でも断る事がたまにある。

理由は「これ以上ライバルは増やしたくないのです」との事。

ライバル？何のこっちゃ？

そう思い聞いた事があるのだが、ウマくはぐらかされ教えてくれな
かった。

「まず始めに、薄力粉にココアパウダー、ブラックパウダーを泡立
て器でしっかり混ぜてくれー」

俺は意識を料理に戻し、部員みんなに手順を教えて行つた。

「じゃあ今日はこれで終わる。ありがとうございました」

「「「ありがとうございました」」」

調理が終わり、俺は急いで家庭科調理室を飛び出した。

思いの外、後片付けに手間取りクラブ終了時刻をやや過ぎてしまったのだ。

いつもなら気にする事はないが今日は美都が食事に来るのだ。

それに和もいる。

ちなみに和にはメールで、遅くなるから先に帰っておいてくれ、と伝えてある。

後、どれだけお腹がすいても料理だけはするな、とも伝えてある。

家に帰って見たら、あるのは家の形をした真っ黒な炭でした…

なんて事は避けたいからな。

「あ、あの…一ノ瀬君」

「ん？」

後ろから声をかけられ振り返ると、そこにいたのは水沢だった。

なぜか俯いてモジモジしている。

「どうした？水沢？」

「あ、あの…よかったら…その…一緒に帰りませんか？」

「んー…ああ、いいよ」

「本当ですか！ありがとうございます！」

そう言つて水沢はペコリと頭を下げる。

「そこまでしなくても…」

そんなこんなで2人で料理について話しながら帰っていると、校門前に見覚えの顔がいるのを発見する。

「どうしたんだ？中溝？1人で突っ立って」

「ああ先輩！待ってたんですよ。一緒に帰りたくて。ダメですか？」

「俺は別にいいぞ。でも、水沢が…」

「いいですよ、一ノ瀬君。私は水沢 麗奈です。一ノ瀬君の所属する料理部の部長です」

ん？

俺が所属しているって言わないといけない事か？

料理部部长である事だけ言えいい様な気がするが…。

しかもやたらと強調されてたし。

「はじめまして、水沢先輩。中溝 和紗と言います。一ノ瀬先輩とは、昼ご飯と一緒に食べさせて貰っています」

こっちも同じく、俺と昼ご飯を食べてるってわざわざ言う事か？
更に同じく、やたらと強調してたし。

「それはそうと先輩」

「ん？」

しばらくの沈黙の後、中溝が話しかけてくる。

「今日、榎本先輩が一ノ瀬先輩の所に晩ご飯を食べに行くんですね？」

「どうしてそれを？」

確かあの約束をした時、中溝は教室から出て行った後だったような…

中溝は俺の疑問に答える事なく、話を続けて行く。

「それで、ボクも御一緒にしたいんですけど…いいですか？」

「ああ、いいよ。食事は多い方が楽しいからな。用意ができたならメールするから、それまで家で待機しといてくれ」

「ありがとうございます先輩！こつしちやいられない！先輩、ボク用意があるので先帰ります」

そう言つて中溝はダッシュで帰つていった。

…一緒に帰るんじゃないかったのか？

「まあいいや。それより水沢、お前も一緒に晩ご飯食べないか？」

「え？え？わ、私が一ノ瀬君の家でし、食事ですか？」

急に話しかけられたからかあたふたしている水沢。

「嫌だったか？」

「いえ、そんな事はないです！とても嬉しいです」

「じゃあ、さつきも中溝に言ったが用意ができたならメールするから、自宅で待つててくれ」

「わかりました！」

そう言って水沢はカバンからケータイを取り出し、誰かに電話を始めた。

2言3言話すと水沢はケータイをしまい、俺にこう言った。

「私も準備をしなければならなので、これで失礼します」

「失礼って、今から一緒に……」

俺はその続きを言う事ができなかった。

なぜなら、目の前にいかにもお嬢様専用と言ったリムジンがいつの間にか止まっていたからだ。

おいおい……

連絡してまだ1分も経ってないぞ……

この車、どこで待機してたんだ？

俺が呆然と立ち尽くしている中、水沢は俺に微笑みかけながら車に乗り込み、帰って行った。

「さて……………帰るか」

俺はさみしく、1人呟いた。

第8話 ラノベやマンガのように思い立ったらすぐに部活を作れる程、学校の規

誤字脱字や矛盾点などありましたら、ご報告よろしくお願いします。

また、感想などもお待ちしております。

第9話 恋する女の子の気持ちは複雑なんです（前書き）

投稿が遅くなり申し訳ありません。

今回はヒロイン視点です。

第9話 恋する女の子の気持ちは複雑なんです

「冬夢の家で食事…冬夢の家で食事…」

私、榎本 美都は自分で言うのも何だが、正直浮かれていた。

冬夢の家で食事なんて…果たして何年ぶりかしら…

私の記憶が正しければ、確か小学校4年の時に食べたのが最後のはずだ。

あの時は冬夢のご両親が作って下さった料理だったが、今回は違う。

そう…冬夢の手料理を食べれるのだ。
しかもできたての。

「ウフフ…」

そう考えただけで自然と顔がにやけてしまう。

「でも…こんなにライバルが増えるなんて…予想外だったわね…」

着て行く服を選びながら、私は呟く。

後輩の中溝 和紗に料理部部長の水沢 麗奈、そして……

冬夢と同居していると言う親戚の音尾 和。

「だ、大丈夫よね…冬夢に限って…いくら同居してるとはいえ…音

尾さんと…ま、間違いを起こすような事はないはずよね…だってあの鈍さだし…」

冬夢の鈍さは筋金入りである。

自分に好意を抱いている女子が複数人いる事にまるで気付いていないのだ。

少しは女心と言うモノを学んで欲しいのだが…

女心を理解して欲しくないと思っている自分がいるのも確かである。

女心を理解する。

つまり、それは私やその他の女子が冬夢に対して抱いている気持ち
を理解されるのと同じ事。

それが恐いのだ。

その時に冬夢がどんな反応をするのかが恐いのだ。

もし私を選んでくれず、他の女子を選んだら…

そう考えただけで、胸がギュッと驚掴みされたように痛くなり泣き
たくなってしまう。

それなら早く告白してしまえばいい、という人がいるかもしれない。

しかし今、冬夢の中で私の位置付けは残念ながら「幼馴染」止まりである。

つまり私の事に恋愛感情を抱いていないのだ。

告白したら、冬夢の事だから付き合ってくれるかもしれない。

それでも、もしかしたらムリかも…と悪い方に悪い方に考えてしま
うのだ。

情けないと、意気地なしだと自分でも思う。

でも…

「って何、私暗くなってるのよ。音尾さんがいるとはいえ、冬夢の家で食事なんだから明るくなくちゃダメよね。それに冬夢のベクトルが私に向いてないなら、向かせればいいだけ。他の子には負けないわ」

そう言って私は頬を軽く叩く。

そうだ。

クヨクヨしている暇があるなら、フられるのが怖いなら、冬夢に好きになって貰えるように、絶対にフられないように頑張ればいい。

冬夢は鈍いから確かに大変かもしれない。

それでも私は諦めない。

だって私は…

「冬夢の事が大好きだから」

「　　」

「お姉ちゃん、ご機嫌だね」

「そうかな？」

「だって物凄く嬉しそうな顔して、鼻歌歌ってるんだもん。誰だつてわかるよ。どうしたの？」

「実は今日、一ノ瀬先輩の家でご飯食べるんだ」

「一ノ瀬先輩って…確かお姉ちゃんの大好きな人だよね？」

「だ、大好きッ？」

ボク、中溝 和紗は思わず声を裏返らせる。

そりゃそうだ。

いくら弟（名前は秀明^{ひであき}と言い中2だ）とはいえ、急にそんな事を聞かれたら普通は驚く。

「お姉ちゃん、顔真つ赤だよ」

秀明が意地悪そうに笑う。

「もー秀明のバカ！」

反論できないのが悔しくて、ボクは自分の部屋に逃げるように向かう

扉を強く閉めカギもかけた事を確認して、ボクはどっとため息をついた。

「はぁ」…先輩に頼んだ時は気が付かなかったけど…先輩の家で食事って…物凄いイベントだよな…」

そうなのだ。

他のライバルがいるにしても、先輩の家で先輩の作った料理を先輩

と一緒に食べる、と言う事実には変わりはないのだ。

「もう緊張してきちゃったよ…」

先輩の家に行った事は一度だけある。
でもあの時は、玄関までしか入っていない。

しかも、先輩の事を意識してなかったのだ。

今回とは条件が違いすぎる。

「あー何着て行けばいいんだろう?」

ボクはそう呟きながら、クローゼットを開ける。

そこにはヒラヒラのスカートなどカワイイ女の子っぽい服…

…などではなく、ジーパンやチェックのブラウスなど男の子っぽい服ばかりが並んでいて…

「ボクには男の子っぽい服が似合うのはわかってるんだけど…」

やっぱり好きな人には女の子らしい所を見せ付けたい訳で…

「でも、スカートなんて…似合わないし…て言うか…そんなの持っていないよ…やっぱり…ボクは女の子っぽい魅力ないのかなあ…」

そんな感じで、悩んでいるとドアの向こうから秀明が話しかけてきた。

「お姉ちゃん、もしかして着る服で悩んでるのー？」

「うん、まあね」

「もう…どうせお姉ちゃんの事だから、女の子っぽい所を見せ付けたいのに…とか考えてるんでしょ？」

「ど、どうしてわかったの？」

「何年弟やってると思ってるの？13年だよ、13年。これだけ長い事やってたら単純なお姉ちゃんの考えぐらいわかるよ」

「単純って…」

弟にそんな事を言われるとは…何だか悲しくなってきた…

「お姉ちゃん、ムリに着飾る必要ないんじゃない？」

さっきまでのふざけた感じから一変して真剣な声で言ってくる。

「自分らしさをアピールした方がいいよ。ムリして女の子っぽくしなくてもお姉ちゃんには他にも魅力的な所、沢山あるんだから」

「ホント？」

「ホント。弟の言う事を信じなよ」

「……ありがと、秀明」

秀明の言う通りかもしれない。

ムリをして女の子っぽくする必要は…

……って…

「よく考えてみたらそれ何のフォーローにもなっていない！結局、ボクに女の子らしさがないから他の所で勝負しろって事でしょ！」

「あ、ばれた？」

そう言って走って逃げて行く音がドアの向こうから聞こえてくる。

「……でも、必ず振り向かせて見せますからね。先輩」

ボクは力強く呟いた。

「一ノ瀬君の家での食事…どうしたらいいのでしょうか…」

私、水沢 麗奈は戸惑っていた。

一ノ瀬君に食事に誘われたのはいいのだが…

生まれてこの方、一度も異性の家に訪問した事がないのだ。

しかも、他に女の子がいるとはいえ、いきなり異性と食事である。

異性は異性でも、相手がどこにでもいる普通の知り合いなどだったなら、ここまで悩んだりはしなかっただろう。

誘ってきた相手は…先程も言ったように一ノ瀬君なのだ。

そう、私の好きな一ノ瀬君なのだ。

「どんな感じの服を着て行けばいいのか…何か持って行くべきなのか…全くわからないです…」

そこで、私は机の上に付いているボタンを押す。

これを押す事で…

「失礼します、お嬢様。いかがなされましたか？」

執事である米道よねみちを呼び出せるのだ。

「今日、一ノ瀬君の所へご飯を食べに行く、と言っ事はお話ししましたよね？」

「はい。確かに聞きました」

「それで、今用意をしているのですが…この言っ事は初めてなので…どうすればいいのかわからなくて…」

「それで私を？」

「はい」

そう言っつと米道は顎に手を当て、何やら考えて始めた。

そして、しばらくして

「失礼ながら、一ノ瀬様はお嬢様の想い人でいらっっしゃられるのですよね？」

と聞いてきた。

「え、ええ…そう…です」

「でしたら、お嬢様」

そう言つて、米道はニコリと微笑む。

「お嬢様のお好きな様にするのが1番かと」

「私の好きな様に…ですか？」

意味がイマイチわからず、私は思わず聞き返す。

「はい。確かに私はこのような場合で、どの様にすれば良いのか知っております。そして、お嬢様にお教える事も可能でございます。しかしお嬢様。それでは一ノ瀬様に見て頂くのは…言い方が悪いかもしれませんが、私の作り上げたお嬢様になってしまいます。一ノ瀬様にはお嬢様が自分自身で考えて、見てもらいたいお姿を見て頂くべきかと」

「でもそれで失敗してしまつたら…一ノ瀬君は私の事を嫌いになつ

てしまうかもしれません。それが嫌なのです」

「お嬢様はそう仰っておりますが、いつも私がお嬢様から聞いております一ノ瀬様はその様な事でお嬢様を嫌いになつてしまわれる程、冷たい方ではないと思われませんが？仰っていたではありませんか。一ノ瀬様の優しさに惚れました、と」

「確かに……そうでした。一ノ瀬君は心優しいお方です」

そうだった。

一ノ瀬君は私がどんなに料理で失敗してどんなに迷惑をかけても、また部長としての仕事を手伝って欲しいと頼んでも、決して嫌そうな顔はしなかった。

いつも笑顔で許してくれ、手伝ってくれた。

一ノ瀬君はそう言う人だった。

「ありがとうございます、米道」

「いえ、執事として当然の事をしたまでです。それでは私はこれで失礼させていただきます」

米道は深々と一礼し、私の部屋から出て行った。

「見てもらいたい私……ですか」

私は呟きながら、クローゼットからお気に入りの白いワンピースを取り出す。

「一ノ瀬君、私頑張りますから」

そう言って、私は小さく握りこぶしを握った。

「へくしょん？へくしょん？へくしょん？」

「どうした、冬夢？風邪か？」

「いや…違う違う。もしかしたら噂されてるのか？」

「冬夢が？それこそ違うだろう」

「…ひどい事言っな…まあいいや。用意もできたし、みんなにメル送っておくか」

第9話 恋する女の子の気持ちは複雑なんです（後書き）

誤字脱字や矛盾点などありましたら、ご報告よろしく願います。

また、感想などもお待ちしております。

第10話 食事をする人数が多ければ多い程、楽しくなると言うわけでは必ずし

いきなりだが、俺は食事と言うのは楽しむべきだと思っている。

ただ出されたモノを口に運び、噛み、そして飲み込む。

それだけじゃホントに「食べた」とはいわない。

五感をフル動員するのは当然で、もし他の人がいるのなら、料理の感想を言いあったり取り止めのない会話をしたりする。

このように楽しむ事で、初めて「食べた」と言えるんじゃないか？

だから正直な所、和と一緒に住むとなった時、俺は嬉しかった。

なんせ中学の時から、家ではずっと1人で食事してたからだ。

まあ一人でじつくりと食べるのも、色々な発見があって楽しかったが。

それでもやっぱり他の人と一緒に食べる楽しさには敵わないワケで…

今晚、美都がご飯を食べに来る事になり、それならもっと呼んでもっと楽しい食事にしようと思ったのだが…

「じゃ、料理できたから今から運ぶよ」

「せんぱーい、ボクもうお腹ペコペコですよ」

「一ノ瀬君がどんな料理を作ってくれたのか楽しみです」

「当然、唐揚げはあるだろうな？」

「はあ…」

どうしてか、美都のテンションは低かった。

「ん？どうしたんだ？美都？何か元気がないみたいだが…」

気になって俺は美都に聞く。

「ねえ…冬夢、薄々答えはわかってるけど聞かせて貰うわね。どうして水沢さんと中溝さんがここにいいのかしら？」

俺の質問を完全にスルーして、逆に美都が聞いてきた。

口調はとても穏やかで、笑顔なのだが…

…どうしてだろう…目は全然笑ってないし、有無を言わさないような威圧感が言葉にこもっている。

「い、いや…だって…大人数で食べた方が楽しいかなあ…と思いましてですね…」

威圧感に圧され、詰まりながらも俺は何とか答える。

幼馴染相手に敬語口調になってる所は…まあ、察してくれ。

「はあああああ」

美都は盛大にため息をついた。

おい、美都。ため息つくと幸せ逃て行くぞー。

前までは、こんな迷信あるわけない、とか言つて信じなかった。

しかし今は神様がいると判明してるわけで…もしかしたらため息ついたら幸せをリアルに神様が何かに奪われるんじゃないかと考えてる。

…やっぱり考えすぎか。

和いわく、神様がみんなチート能力ありつて訳ではないらしいし…。

「覚悟は決めてたけど…この鈍さには毎回毎回呆れさせられるわね」

「ホント、ボクも苦労させられてますよ…」

「でも、鈍いからこそ起きるイイ事もあるぞ？」

「確かにそれは言えます。要は私たちの接し方次第で、いいようにも悪いようにもなるって事ですな」

俺が変な事を考えている間に、4人は楽しそうに笑いながら話していた。

内容はイマイチ理解できないが…。

美都が機嫌を直しているのだよしとしよう。

「ほら。簡単なモノしか作れなかったが、その辺は許してくれ」

そう言って、テーブルに出したのは鍋に入ったカレー。

やっぱり大人数で食べるなら、これしかないよな。

カレーが嫌いって言う人はまずいないし、食べる量を自分で調節できる。

辛さを誰かに合わさないといけないのが、唯一の欠点と言えば欠点だ。

ちなみに今回は、女の子がいると言う事で甘口にしてある。

俺は辛口が好きなのだが…ここは女の子に合わせないとな。

「ご飯は自分でついでくれ。ルーは俺がつぐから。後、福神漬けも各自で頼む」

「それはわかったが…冬夢よ、唐揚げはないのか？」

俺にご飯の入った皿を手渡しながら、和が聞いてくる。

「いや、流石に2日連続で唐揚げは…と思ってな」

「…そうか……ああ、唐揚げカレー食べたかった……」

そう言って和はガツクリと肩を落とす。

なあ、和よ…

…お前、どれだけ唐揚げ好きなんだよ…

今日の弁当にも入れてやっただろ？

しかも、実は弁当の中に入れた唐揚げの数、和の方が俺のより1コ多いんだぞ？

それでも貴女はまだ唐揚げが食べたいと？

もう完璧に中毒だな、これ。

早急に治療する必要があるぞ。

しばらく唐揚げはお預…

ん？

チョット待て。

考えるんだ俺。

唐揚げジャンキー和から唐揚げを取り上げたとしよう。

当然、和は唐揚げを手に入れようとするだろう。

ここまではいい。

問題はどつやって唐揚げを手に入れるか、だ。

入手方法は大きく分けて2つあるだろう。

？どこかスーパーなどで唐揚げを購入する

？自分で唐揚げを作る

？は全然OKである。

買ってくる量が常識範囲内であれば、の話だが。

市販の唐揚げって意外と高いからな…。

そして？の自分で作る。

そう…これが大問題なのだ。

和が料理を作る。

これはキッチン、最悪の場合は家が消失する事を意味する。

お粥作るだけで土鍋1つが犠牲となるのだ。

油を使う唐揚げを和が作ったら…

…確実に只事では済まなくなる。

料理がヘタな女の子って萌える、などとバカげた事を言っているヤツらは和が料理している横に立ってみる。

料理下手がどれだけ危険で恐ろしい存在かが、よくわかると思う。

俺は和が唐揚げを作ると言うD E A D E N D直行のイベントを避ける為に、和に言う。

「和、今日はカレーでガマンしてくれ！明日絶対に唐揚げ作ってやるからな？」

「おお！明日、唐揚げ作ってくれるのか？絶対だぞ！」

和は嬉しそうに頷きながら、席に座った。

よし！

任務完了だ！

これで俺の家が消失すると言っ事態は未然に防がれた。バンザイ！

しかし、この調子でいくと…気付けば3食全部唐揚げと言っ事態になりかねない。

唐揚げは飽きにくい、と前にテレビでやっていたが…

うん。

3食全部唐揚げって…

もうそんなレベルじゃないよな…。

「一体どうしたものかなあ…」

「どうしたんですか？一ノ瀬君。私でよければ相談にのりますよ？」

ご飯の入った皿を持った水沢が聞いてくる。

どうやら俺の独り言が聞こえてしまったようだ。

「いや、大丈夫。他人に相談する程、深刻な問題じゃないから」

唐揚げ中毒をどうやって治療するか…なんてアホらしい事、いくら部活仲間とは言え相談できない。

ヘタすれば「家消失END」か「3食全部唐揚げEND」になる、

リアルに深刻な問題なのだけでも…

「本当に大丈夫ですか？私、相談にのりー」

「せんぱーい、まだですかー？ボク、もうホントにお腹ぺこぺこなんですよー」

「ねえー冬夢、いつまで待たせるのよ？」

水沢の声を遮って、中溝と美都が聞いてきた。

「あ、すいません」

「おお、悪かった悪かった」

まあ…何とかなるんじゃないか？

俺は解決策を考えるのを諦め、3人の皿にカレーを入れた。

「じゃ、いただきます」

「「「いただきます」」」

久々に大人数で囲む食卓。
いやはや、嬉しいね。

発言がおっさんくさい？

ほっとけ？

「こ、これは…」

和が大きく目を見開いてカレーを凝視していた。

「何か変なモノ入ってたか？」

「いや、違う。ウマすぎて驚いていたのだ。最高だぞ、このカレー」

「そ、そうか。そんなにウマいか？俺の作ったカレーは？」

「はい！ボク、こんなにおいしいカレー食べたの初めてです！」

「とてもおいしいです。これ…ルーも手作りですよね？」

「流石、料理部部长だな。甘口のルーを作るのは初めてだから…上手くいくか不安だったんだが…」

俺がそう言つと美都は呆れたように、こう言つた。

「ルーも手作りなの？冬夢、あんたつて凄いのね。後で私にも作り方教えてくれるかしら？」

「作り方は企業秘密。ルーをあげる事ならできるとな」

ちなみに、このルーを完成させるのに3年の月日を費やした。

え？

この暇人が！、って？

うるせー！

それだけ俺の料理に対しての愛情は…

…何、恥ずかしい事言っただよ…俺。

「ホント？くれるの？」

「ああ。作り過ぎたからな。帰りに渡すよ」

「あ！ボクも！ボクも欲しいです！」

「私も欲しいのですが…」

「冬夢、私も欲しい！」

「ああ、全然OKだ。和以外は、な。和にはキッチンに立たせないと心に決めているから、料理材料は絶対に渡さない」

「ヒドい！ヒドいぞ、冬夢！」

「ヒドいのは和の方だ！お粥を作ろうとして土鍋を―」

「バ、バカ！それをみんなの前で言うな！」

俺の声を遮るように、和が大声で怒鳴ってくる。

やっぱり恥ずかしいのだろう。顔は真っ赤だった。

「一ノ瀬先輩。その話詳しく教えて下さい！」

「わかった。実はな―」

「と、う、む？？？」

「ちょ、ちょっと音尾さん！冬夢にフォークを投げようとしないの
」！」

「あらあら」

「水沢さん！笑ってないで音尾さんを宥めるの手伝って！」

やっぱり食事は大人数の方が楽しい。

俺はそう思う。

第10話 食事をする人数が多ければ多い程、楽しくなると言うわけでは必ずし

誤字脱字や矛盾点などありましたら、ご報告よろしくお願いします。

また、感想などもお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3030z/>

神様 に入りました。

2011年12月28日22時47分発行